

生徒・保護者の皆様

厚木高等学校長

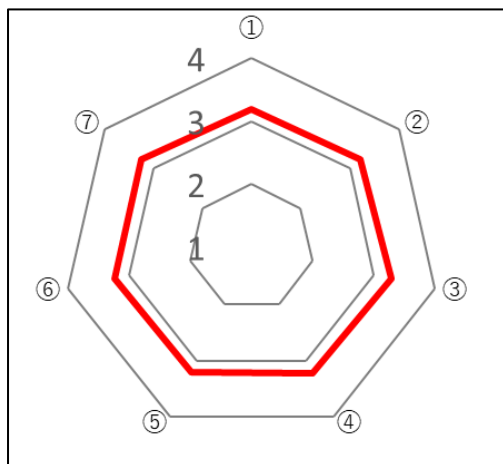
令和4年度 第二回「生徒による授業評価」結果について

早春の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、今年度12月に実施した「生徒による授業評価」について報告いたします。全教科全学年の合計では、全ての質問項目について肯定的な回答を示した生徒が85%以上となっており、レーダーチャートの形もバランスの良いものとなりました。また、多くの質問項目について評価4（かなり当てはまる）の割合が昨年度、一昨年度と比較しても増加しており、本校教員の授業改善の成果が表れたと考えられます。今後も、質の高い授業を目指し、教職員一同更なる研鑽を重ねて参りますので、引き続きご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 結果

質問項目	授業の在り方について			学習の状況について			取組
	① ねらい、振り返りの機会	② 話し合いの機会	③ 課題解決の機会	④ できるようになった実感	⑤ 視野が広がった	⑥ 課題解決ができた	
4：かなり当てはまる	36%	40%	41%	38%	38%	37%	38%
3：ほぼ当てはまる	49%	45%	47%	48%	48%	50%	50%
2：あまり当てはまらない	12%	12%	10%	11%	12%	10%	10%
1：ほとんど当てはまらない	3%	3%	2%	3%	3%	2%	2%
平均値	3.2	3.2	3.3	3.2	3.2	3.2	3.2



【質問項目】

- ① 毎時間の授業や単元（内容のまとめ）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある。
- ② 単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある。
- ③ 単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。
- ④ 授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた。
- ⑤ 他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた。
- ⑥ 授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた。
- ⑦ 授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた。

2. 各教科の後期にむけた取り組み

今回は質問項目③「単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある」及び質問項目⑦「授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた。」について、各教科で分析を行い、次年度に向けての取り組みを検討しました。

【国語】

質問項目③の分析

9割近くの生徒が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答しており、教科全体で取り組んできた授業改善に一定の効果があったと考えられる。今年度は自己の考えをまとめる手段として、昨年からの継続課題であった ICT 活用の取り組みも重点的に行った。オンラインでの提出機会を増やしたことで編集・共有の利便性が増してより効率的・能動的な学習が見込めるようになった一方で、手書きでの文章作成に苦手意識を持つ生徒が増加しているという印象も拭えない。次年度はよりバランスよく学習活動を行える年間計画を策定し、総合的な国語力の養成に取り組むたい。

質問項目⑦の分析

全体としては良好な評価を得ているが、不十分と考える生徒も一定数おり、一層の努力が必要だと思われる。「これまで国語の授業で学んだこと」だけでなく、「様々な教科で学んできたこと」と学習者自身が繋げて捉えながら自然に思考を上段階へ進めていくことができるような施策を教科全体で講じていきたい。授業者側も複数名で教材準備を行うなど、様々な視点と多様な切り口で学習事項を整理することが有用と考える。

【数学】

質問項目③の分析

1 学年 2 学年ともに 10%ほどの生徒が「あまり当てはまらない」と回答している。すべての生徒が課題解決力の向上を実感できるよう、教科として改善を図っていきたい。数列の複利計算など、社会生活と密接な関わりを持つ分野においては課題設定が比較的容易であると考えられる。数学的な見方をもって現実的な利率を考える機会を持たせるなど、実生活の課題解決と結びつけるような工夫を考えたい。

また、これまで力を入れてきた、様々な視点から一つの問題を捉える授業展開や、生徒自身の気づきを重視した主体的な学びについても引き続き教科全体で取り組んでいく。

質問項目⑦の分析

数学Ⅲ、数学探究 D、ヴェリタスⅢにおいて特に高い評価を得ている。学習が高次に上がるほど、それまでの既習事項と結びつけやすくなる傾向が窺える。その点において、「良好」以外の評価が他学年よりも多くなる 2 学年次の学習が今後の大きな課題であると言える。1 年次に学んだ高校数学の初歩とリンクさせながら、無理なく次段階に進んでいけるような授業展開を検討したい。

【地理歴史公民】

質問項目③の分析

教科全体としては、目標値（「かなり当てはまる」への回答が 50%以上）を達成できなかった。課題解決・課題探究型の学習を取り入れる授業時間の確保が大きな課題である。公民科の科目では、「多様な価値観と触れ合い、自身の価値観の形成と深化を図る」ことが大きな課題であることを年度当初に示したことが、評価点が高かった要因の一つであると分析した。次年度は、他の科目においても、各単元で「本単元の課題」や「何をもって課題解決したとみなすのか」を予め生徒に提示していく。これにより、学ぶ意義の意識強化にもつながり、より主体的・能動的な学びが実現できると思われる。

質問項目⑦の分析

3と4を回答した生徒の割合が、教科全体ならびに各科目（日・世・地・公）で90%以上を達成した。義務教育段階で学習した事項を適宜振り返りながら授業を展開したことも一要因であると分析している。引き続き、学習事項を振り返る学習活動を充実させていく。その際に割り当てる時間については十分留意する。

【理科】

質問項目③の分析

「かなり当てはまる」、「ほぼ当てはまる」が全体で85%であり、生徒に課題解決の機会を与える授業の展開ができているものとする。定期的な演習で知識の定着を図り、それらの知識を用いて、授業での問いかけについて考える機会を与え、生徒が主体的に考える授業を実践できたものと考えている。

一つの問いについて一つの答えではなく、多角的に考えて、原理・法則を用いて説明していくことにより、生徒がより主体的に考え、課題の解決につながっていくものと考えられるため、今後の教材研究や授業の展開を検討していく予定である。

質問項目⑦の分析

「かなり当てはまる」、「ほぼ当てはまる」が全体で88%であり、生徒に既習事項と関連した授業の展開ができているものとする。ICTを活用した授業等の実践により、学習の振り返りや発展的な学習の機会が増え、生徒自身が既習事項と関連付けながら学習しているものと考えられる。小学校や中学校までに学習してきた内容および日常生活との関連を十分に踏まえていくことにより、より一層、既習事項との関連が強くなることが予想されるため、今後の教材研究や授業の展開を検討していく予定である。

【英語】

質問項目③の分析

3と4の回答で90%近い科目も多く、どの授業でも自分の考えをまとめ、解決方法について考える機会を持つことができたと思われる。次年度も自分の考えをまとめたり、解決方法について考えたりするための問いかけを工夫し、それぞれの学年での学習課題に適した言語活動の一層の充実を図る。

質問項目⑦の分析

3と4の回答が80%を超えており、多くの場面で授業の内容と既習事項を関連付けて理解できているようだ。英語の授業では様々な分野の内容が英語で表現されており、まさに教科横断的な学習が必要な教科であることから、今後も継続して、既習事項を関連付けて学ぶための工夫及び、各学年での学習課題にあった言語活動の充実を図る。

【保健体育】

質問項目③の分析

3と4の回答が90%以上を占めており、課題解決について考える機会を十分に設けることができていると言える。体育においては、グループ戦術を考えるうえで、自らの課題やグループの課題を把握することで、活動に対する積極性が生まれ、それぞれの活動に活かした結果と考えられる。

現在も行っているが、スマートフォン等で自分のパフォーマンスを撮影し、その画像を見ながら自分自身の修正点を見つけさせることにより、動きのイメージをつくりながら技術・パフォーマンスの向上を図るといった取り組みを継続する。また、選択種目で前年度と同じ種目を選択した生徒やその種目の部活動の生徒に、デモンストレーションをやってもらうことで、視覚的にイメージし易いような工夫をする。

質問項目⑦の分析

3と4の回答が84%を占めているので、概ね良いと考えられる。体育では、中学校で学んだ種目が多くあるので、高校での授業でその経験を活かした活動ができているものと思われる。

今後4と回答する生徒が、今回の34%以上となるように、教員側も以前に学んでいる内容に理解を深めたうえで、授業を展開できるようにしていきたい。また、前年度学習した内容を復習する時間をとることで、更なる技術の上達や習得をさせていきたい。

【芸術】

質問項目③の分析

美術科において個人で完成させた作品は、ある意味それ自体が「自分の考えや思いをまとめ解決した結果」であり、音楽科での実技を伴う取り組みは原則一人一役のグループワークで行うため、「自らの考えを表明しながら協働的に課題解決に向かう場面」が主である。こうした教科的な学習過程における特徴と、課題に対する本校生徒の自発的な取り組みが相乗的に重なった結果、9割ほどの生徒が本項目について肯定的に捉えることにつながったのではないかと考えられる。

習得・活用・探究という一連の学びの過程の中で、中学までに得られた知識や既習内容を意図的かつ相互に関連付けて取り上げたり、「一人1台PC」の利点を生かして生徒自身に解決策を考えさせる場面をより多く設定するなど、芸術科特有の「創造的な学習」を生徒が実感を伴いながら確かな根拠をもって理解することができるよう、今後も引き続き題材の精選や工夫に努めていく。

質問項目⑦の分析

概ね良好な評価が得られているが、2割弱の生徒は否定的な回答であった。芸術科の各題材は、音楽であれば「歌唱・器楽・創作」、美術であれば「デザイン・彫刻・描写」のように独自のジャンルとして確立されており、授業ではそれら一つを集中的に取り上げ完結させてから次の題材へと移行するため、「これまで学んだこと」と「いま学んでいること」を結びつける諸要素が見えにくい。そのため、結果的に「学習が題材ごとに区切られ独立している」かのような印象を生徒に与えやすいのではないかと考えられる。

「楽譜や資料の解説」「作品の歴史的な背景をふまえた考察」等のような俯瞰的な学習の視点を随所で取り上げ、既習事項との共通点や相違点を考えさせることで、学習を継続的かつ横断的な取り組みに発展させ、より実感を伴った深い理解へとつなげていく。

【家庭科】

質問項目③の分析

設定したテーマについて、自分なりの考えをまとめたり、解決方法を考える課題を設定したが、課題について調べた内容に対する感想に留まるものが多かった。アンケートの結果でも「ほぼ当てはまる」の割合が高かった。より身近なテーマを設定するなど、生徒が自分自身の生活を振り返りながら考えられるよう工夫をしていく必要がある。

生活に関わる内容を扱っているが、生徒自身の生活と結び付けて考えさせることができなかつたので、イメージしやすくなるような教材の工夫をする。たとえばニュースなどで現在起きている事を題材にししながら、内容のまとめりと関連付けて、自分なりの考えをまとめたり、解決方法について考えたりする時間を取りたい。また、グループワーク等、他の生徒と意見交換する機会が少なかつたので、次年度は増やしたい。

質問項目⑦の分析

「かなり当てはまる」と「ほぼ当てはまる」の割合は86%と他教科と比較して差はないが、ほぼ当てはまるの割合が高いため、他教科との連携も含めた工夫が必要である。実習なども、学んだことを実践する場であるが、時間内に終わらせる事に意識がいくため、関連付けの意識を持って取り組めるような内容を検討していく必要がある。

ある。他教科で扱っている内容とのつながりを持たせて説明するなど柔軟な対応をしていきたい。（例：保健で妊娠・出産の授業を行った後に、保育の授業を行う等）

授業見学以外の時間で他教科の授業を目にする機会がなかったため、授業の進め方や工夫している点も含めてどのような内容を行っているのか共有する。"

【ゲェリクスⅠ・エンジニアリング】

質問項目③の分析

回答3・4の数値を合計すると93%となり、全教科合計値の84%よりも高い数値となった。普段の授業から、クラス内の友人と協力しながら課題解決に取り組みせたり、また科学的実験の中でグループで協力・協議しながら共通の課題に取り組む機会を多く設定したことに起因すると考えられる。

「主体的」という観点では、課題を配信し、自分に合ったペースで取り組むことができ、また必要であれば班内と協力し、教員に質問できる現在の授業展開、学習環境をしっかりと維持、整備していく。また各課題の内容や評価方法を見直すことで、生徒のより深い学びの実現につなげていく。

質問項目⑦の分析

回答3・4の数値を合計すると88%となり、全教科合計値の92%よりやや低い数値となった。取り扱う内容が統計やプログラミングということもあり、生徒に馴染みのない面もあるが、数学の学習内容やトピックを既習事項と関連付けること、また科学的な実験を通じた探究学習の中で視野を広げさせ、より幅広い知識を活用させることで、更なる数値の上昇が見込めると考えられる。

上記の内容を踏まえた教材の研究や、生徒へのアプローチの仕方を考えていく。

【ゲェリクスⅡ】

質問項目③の分析

ゲェリクスⅡ全体では、良好（「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」）と回答した割合は8割を超えており、科目の特性を理解した上で主体的に授業に取り組んでいると言える。しかし、「かなり当てはまる」への回答を α 選択者と β 選択者で分けて分析すると、 α 選択者が51%、 β 選択者が34%となっており17ポイントの差が生じている。 α β の選択は、生徒が自身の意欲に応じて選択しているため、ある程度の差が出ることは当然の結果ともいえる。この結果を踏まえ、次年度は生徒の主体性をより促すために、 α グループと β グループには異なったアプローチをする等の工夫を行う。また全体で10%が良好ではない（「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」）と回答していることから、各授業担当者が、探究活動の進捗状況に応じた軌道修正等のサポートをする必要があると考えられる。

質問項目⑦の分析

全体として良好な回答は8割を超えており、既習事項との関りを意識して探究活動を行うことができていると言える。内訳は「かなり当てはまる」への回答割合が「ほぼ当てはまる」への回答割合の半数以下にとどまっていることが課題である。また質問項目③と同様に、 α β での差も課題として挙げられる。探究活動を生徒が進めていく中で、教員との対話的なサポートをより綿密にすることで、既習事項との関連を意識した多角的な思考を促すことができると考える。また、今年度から始まったエンジニアリングで学んだ検定などの知識をしっかりと活用させることで、知識・技能の定着を図っていく。